

かんそ芋の製造法は今も昔もほとんど変わっていません。
優しく葉を湿らせる夜霧、荒磯から丘陵地に吹き付ける汐風、豊富な日光、そして産地の歴史と生産者の知恵、妥協のない手作業、それらがあって茨城のかんそ芋に濃厚で透明な甘さが生まれます。

そんな、かんそ芋の担い手である生産者は2度に渡る原子力事故を経験しました。先月20年を迎えたJCO事故では、周辺住民ら666人が被曝し、その後、数年間にわたって風評被害に苦しみました。東日本大震災の際には、東海第二原発が電源喪失の危機に陥る可能性があっただけでなく、福島第一原発事故により、県内生産者は再び風評被害に見舞われました。

東海第二原発では再稼働に向けて準備が進められています。2度の原子力事故、その有事において、「原発」と「かんそ芋」は共存することができませんでした。これが現実です。

ならば、私たちは好むと好まざるにかかわらず、「かんそ芋」か「原発」かという選択をせざるを得ません。

これは、かんそ芋についての話です。

ひたちなか市の大地に根を張って暮らしてきた、人間の営みについての話です。

その未来を創るのは、
あなたの「選択」です。

立憲民主党
The Constitutional Democratic Party of Japan

立憲民主
The Constitutional Democratic Party of Japan

**RIKKEN
MINSHU
号外**
2019.10.10

立憲民主編集部
〒102-0093
東京都千代田区平河町
2-12-4 ふじビル3F
Tel. 03-6811-2301
Fax. 03-6811-2302
goiken@cdp-japan.net
<http://cdp-japan.jp/>

原
発
が
か

か
ん
そ
芋
が

切って、干す、 ひっくり返す。 「変わらないな。」



右が大久保

地域に生きる生産者の声を聴きたい。
大久保清美が生産者を訪ねました。

大久保：かんそ芋をつくって何年ですか？

生産者：この地域でのかんそ芋の生産は100年ぐらいかな、俺は、もの心ついた6歳の頃からだから80年というところかな。

大久保：昔と変わったところがありますか？

生産者：ん、そおよな、変わらないな。

大久保：なんにも、変わらないですか？

生産者：そおよな、今は機械で乾燥している人もいるが、俺らは少ししか作ってないので天日干しだな。

ま、天日干しの方が美味しいと思うが、それは好き好きがあるからな。品種が変わったな。今は「たまゆたか」と「べにはるか」かな、特に「べにはるか」が人気だな。「たまゆたか」は、少し難しいかな、でもな、「たまゆたか」一本でやっている農家もあるよ。そこの畑は「たまゆたか」だ。

土から芋を取り出し、洗ってな、蒸して、一つ一つ皮を剥いて、切って、干す、ひっくり返して干す。繰り返し干す。丹念に大切に、それは、変わってないな。

O：どうして最近人気なんでしょう？

生産者：健康食としていいんだな。添加物なんか入ってないからな。繊維質が多くて、それで甘いからな。

大久保：茨城県は、この辺りは全国生産の90%のシェア、すごいですね。

生産者：土と地域性に合ってるんだらうな。雨が少ない地域だね。海にも近いということもいいのか。

大久保：太陽と夕風があたるからいいんですかね。

生産者：そうよな。米の値段は上がらないけど、かんそ芋は値段が上がるからいいな。

大久保：そういうかんそ芋も、JCOの事故の時は、大変だったと聞きますが？

生産者：うんうん、大変だった。補償金も出たけどな、風評被害が長引いたからな。

大久保：そんなことが無いようにしなければなりませんね。

生産者：そらやそうだ、原発事故なんか、あったら困るわな。



やっぱり、原発はゴメンだ。 生産者の生の声に決意を新たに。

私に農家の生活はわかりません。それだから、生産者の方の声を聞かせていただきたかった。

この度、私がお邪魔したのは、大きな専業農家ではなく、老夫婦二人でかんそ芋をおつくりになっているお宅でした。ご本人は、リハビリに丁度いいと仰ってましたが、綺麗な畑を見れば、並々ならぬご苦労が感じられました。この地域でかんそ芋が作られるようになってから100年、そのうち80年に渡ってかんそ芋を作ってきた方の言葉は重い。度重なる困難をよそに、「変わらないな」というその言葉になぜか涙が出そうなほど胸を撃たれました。

やっぱり原発はゴメンです。「かんそ芋」がある豊かなひたちなか市を未来に紡いでいきたい、今回、改めて強く決意しました。

ひたちなか市議選で
大久保清美さん
立憲民主党公認を決定!!



【プロフィール】

1954年、福岡県小倉市（現北九州市）生まれ、65歳。鹿児島ラ・サール高校を経て京都大学工学部金属系学科卒。

当時、伊方原発訴訟の原告住民側証人（炉心担当）を務めていた榎田劭先生（金属物理学）の薫陶を受け、金属工学の立場から原発の安全性に疑問を抱く。

その後、京都大学文学部独文科に学士入学。早稲田大学大学院独文専攻修了後、ドイツ語教員になる。爾来34年間、ドイツ・バイロイト大学客員研究員、国立沼津高専教授等を経て、現在、同校名誉教授。主な研究分野はドイツ地域文化研究（ドイツの環境政策を含む）。

2018年4月から茨城大学非常勤講師（ドイツ語担当）。浄土真宗本願寺派僧侶。